

ルカによる福音書 9章 28-62 節 「十字架を負う弟子の道」

1A 変貌におけるエルサレムの最期 28-36

1B モーセとエリヤ 28-33

2B 御子に従え 34-36

2A ひとり息子の悪霊解放 37-45

1B 不信仰な曲がった世 37-42

2B 渡される人の子 43-45

3A 弟子たちへの戒め 46-56

1B 子供を受け入れる者 46-48

2B 反対しない者 49-50

3B 拒む者 51-56

4A 用意のない弟子たち 57-62

本文

ルカによる福音書 9章後半を見ていきます。私たちは前回、ペテロがイエス様を「神のキリスト」と言って告白したところを読みました。そしてイエス様はすぐに、ご自身がユダヤ人の指導者に捨てられて、殺されて、三日目によみがえることを話されたのです。これまで、イエス様は数々の不思議と奇蹟によって、ご自身がキリストであることを示されましたが、そのキリストの使命は初めに、人々に捨てられ、殺され、そしてよみがえることだったのです。

そして、イエス様は弟子となるための、重要な教えを垂れました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。(9:23)」キリストが生きておられ、その教えと權威によってこの方は御国を上げられます。しかし、それはキリストが死なれる、罪の供え物となり犠牲を支払うということに基づいているのです。私たちもまた、自分自身を捨てることによって、この方に生きていただくことによって、生きているキリストと神の国を証しすることができます。

1A 変貌におけるエルサレムの最期 28-36

1B モーセとエリヤ 28-33

9:28 これらの教えがあつてから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。9:29 祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。9:30 しかも、ふたりの人がイエスと話し合っているではないか。それはモーセとエリヤであつて、9:31 栄光のうちに現われて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。

イエス様が、「ここに立っている人々の中には、神の国を見るまでは、決して死を味わわない者

たちがいます。(27 節)」と言われていました。その八日後のことです。聖書の数字には象徴的な意味合いがしばしばありますが、七は完全数で神の数です。八は、新しい始まりを意味しています。神の国の訪れは新しい世界の始まりということで、八日後であったと考えられます。神の国におけるご自身の栄光を弟子たちにお見せになりました。

そして十二弟子の中で、連れて行かれます。ヤイロの娘の生き返りを見る時も、この三人が選ばれました。旧約においても、モーセがシナイ山に上った時に、その近くまで三人の者が選ばれました。アロンとナダブとアビフです(出エジプト 24:9)。彼らは、イスラエルの神を仰ぎ見たとあります。足はサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった、とあります。そして「祈るために」また「祈っておられると」と、祈ることが強調されています。ルカの福音書に特徴的です、イエス様はしばしば祈られていました。

そして、御顔の姿が変わります。イエス様は神の栄光の輝きであったにも関わらず、人の姿を取られて僕の姿を取られました。イエス様には、ことなさに見とれる姿はありませんでした。しかし、ご自分の父のところにおられた栄光は違います。ダニエル書 10 章に、その姿でダニエルに現われて、ダニエルはその栄光の輝きによって倒れてしまいました。そして黙示録 1 章で、使徒ヨハネに現われ、ヨハネも死んだ者ようになってしまいました。「それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。その頭と髪は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。(13-16 節)」

そしてモーセとエリヤが現われます。栄光の内に現われています。キリスト者は、復活する時に栄光の姿に変えられますが、彼らも変えられていました。モーセは一度死にましたが、よみがえるという形で、エリヤは死なずに天に引き上げられましたが、同じように栄光に姿に変えられています。ちょうど、キリストが空中に戻ってこられる時に、既に眠っている者は復活し、生き残っている者は一瞬にして栄光の姿に変えられるのと同じです。

モーセは、イスラエルの民に新しい歴史を与えるために用いられた器です。奴隷状態であったのに、それから連れ出されて、神の民として、約束の地で生きるようにされましたが、その時の指導者がモーセであります。主はモーセを通してこう言われていました。「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。(申命 18:15)」今、イエス様はご自分に聞き従う者たちに、新しい世界、神の国に導き入れられるもう一人の預言者となっております。そしてエリヤは、そのキリストの到来の前にやって来る預言者としてマラキ書で預言されています。「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。(4:5)」

したがって、モーセはキリストの型であったし、エリヤはキリスト到来の先駆者であるのです。さ

らにモーセは律法をもたらす器であり、エリヤはイスラエルが危機の時に回復をもたらす預言者の代表でもありました。イエス様は、わたしが律法と預言者を成就するために来たと言われました。いろいろな意味で、モーセとエリヤの登場は神の国の実現にふさわしい姿であります。

しかし、モーセもエリヤも、イエス様と共にエルサレムに向かうこと、そこで最期を遂げられることを話していたのです。ここの「最期」という日本語訳は、エクソドンというギリシヤ語で英語のExodus(出エジプト)と同じものが使われています。イエス様は、十字架につけられ、よみがえり、そして天に引き上げられることが、最期でありました。そして聖霊が降り注がれて、全く新しい神の御国の現れが起こるのです。十字架の贖罪と復活の力によって、人々がキリストの御国に入れられる新しい時代の幕開けです。私たちがイエス・キリストの福音に生きることは、まさしくこの世からエキソダスされた者たちとして、新しい神の国の中にいるのです。

しかし弟子たちには、そのことが理解できませんでした。イエス様が神のキリストであるということは、そのまま異邦人の支配の中にいたユダヤ人がその圧政から解放されて、地上でキリストを王する神の国が到来すると思っていたのです。その根拠となるのが、モーセの律法であり、エリヤのような預言者たちの言葉でした。しかし、律法も預言者も、来るべき栄光に輝く神の国を証しするだけでなく、苦難を受けられる神の僕らの姿も証していました。ヨセフがエジプトの総理大臣になりましたが、その前に兄たちに裏切られ、牢屋に入った苦しみがありました。栄光を受ける前に苦しみを受けるのが、神の選ばれたキリストの姿なのです。

9:32 ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきり目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。9:33 それから、ふたりがイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。「先生。ここにいることは、すばらしいことです。私たちが三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」ペテロは何を言うべきかを知らなかったのである。

この三人の弟子は眠くなっていますが、預言者ゼカリヤも主の幻を見る時に眠っていました。「私と話していた御使いが戻って来て、私を呼びさましたので、私は眠りからさまされた人のようであった。(ゼカリヤ 4:1)」そして彼の見たのは、金の燭台とその背後にあるオリーブの木二本でした。金の燭台は、世に対する光を表していますが、油は聖霊を表し、そしてオリーブの木二本は二人の証人を表します。黙示録 11 章には、二人の証人が患難時代に現われて、神の言葉を語ることが預言されています。その二人は、ここに現われているモーセとエリヤであるかもしれません。

そしてここで眠くなったというのは、十人の乙女と同じような状態を警告しているのかもしれませんが、油を用意していた賢い乙女と、用意していない愚かな乙女がそれぞれ五人ずついましたが、彼女たちはみな眠っていました。その時に花婿が来たのです。主の栄光が近づいている時に、キリスト教会は全体的に眠ってしまっていることを表しているのだと思います。ちなみに、この三人は、ゲッセマネの園でも眠ってしまいます。

ペテロの性格がよく表れています。彼は素直に主のなされていることに感動するのですが、何かをしないと済まない、また何かを言わないと済まない性格です。それぞれに幕屋を造ると言っています。これはおそらく、神の国における仮庵の祭りで、仮庵をつくることから来ていると思いますが、この栄光を記念としたい、残しておきたいと思ったのでしょう。神の栄光に自分が入り込む余地などないのに、彼はでしゃばっています。

そして、ペテロが最も理解していなかったことは、イエス様をモーセとエリヤと同列においたことです。モーセとエリヤはどちらも神の僕であり、キリストを証しする者でした。キリストはモーセとエリヤにとっても主なる方であったのです。

2B 御子に従え 34-36

9:34 彼がこう言っているうちに、雲がわき起こってその人々をおおった。彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった。9:35 すると雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい。」と言う声がした。9:36 この声がしたとき、そこに見えたのはイエスだけであった。彼らは沈黙を守り、その当時は、自分たちの見たこのことをいっさい、だれにも話さなかった。

雲が湧き起りました。モーセの幕屋においても、神殿においても、栄光の雲がそこを満たしました。さらに、イエス様が天から地上に戻ってこられる時も雲に乗って来られます。その栄光の雲が満ちたので、弟子たちは神ご自身の聖さが近づいているのを知って、恐ろしくなりました。そして聞こえてきたのは、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい。」であります。イエス様がバプテスマを受けられた時と同じ言葉です。

弟子たちがこの方がキリストであると知ってから、そこから彼らはかえって、キリストご自身から目を離すようになっていきます。これから、彼らのそうした姿を見ていきます。御国が近づいているのに、その御国の中心であるキリストから目を離す、ということが実は私たちにも起こってきます。主が力強く働かれると、誰がその働きで用いられたのであるか、とか、誰彼がこのようなことを言ったとか、キリストご自身から注目が逸れてしまうのです。ですから、ここで「彼の言うことを聞きなさい。」という言葉がとても大切なのです。自分では理解できなくても、自分では不条理に思われても、自分の悟りに頼らず、自分を捨てて、キリストの命令に聞き従うのです。

そして、この光景はあまりにも畏れ多かったので、彼らは「当時は」沈黙を保っていたとあります。このことをルカは書き記しているのですから、その時には彼らは語っています。使徒ペテロは、手紙の中でこのことを明かしていますが、しかし慎重に語っています。「私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、

天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。(2ペテロ 1:16-19)』

ペテロは、この出来事はキリストが再び来られる時の、その力を現していたと説明しています。けれども、それよりもさらに確かなのは預言の言葉であり、それに心を留めておきなさいと勧めています。

2A ひとり息子の悪霊解放 37-45

1B 不信仰な曲がった世 37-42

9:37 次の日、一行が山から降りて来ると、大ぜいの人の群れがイエスを迎えた。9:38 すると、群衆の中から、ひとりの人が叫んで言った。「先生。お願いです。息子を見てやってください。ひとり息子です。9:39 ご覧ください。霊がこの子に取りつきますと、突然叫び出すのです。そしてひきつけさせてあわを吹かせ、かき裂いて、なかなか離れようとしません。9:40 お弟子たちに、この霊を追い出してくださいようお願いしたのですが、お弟子たちにはできませんでした。」9:41 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまで、あなたがたといっしょにいて、あなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。あなたの子をここに連れて来なさい。」9:42 その子が近づいて来る間にも、悪霊は彼を打ち倒して、激しくひきつけさせてしまった。それで、イエスは汚れた霊をしかって、その子をいやし、父親に渡された。

山におけるすばらしい主の栄光の体験から、一気に悪霊につかれた男の子の現実引き落とされます。イエス様は、弟子たちを中心に、そこにいた人々に対して強い言葉を残されます。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。」という言葉です。これは、主がモーセに対して、イスラエルに対して言われた言葉と同じでした。「主をそこない、その汚れで、主の子らではない、よこしまで曲がった世代。(申命 32:5)」荒野で数々の奇跡を見たのに、主を信じなかったイスラエルの民と同じように、不信仰な世代であると嘆いておられます。

弟子たちの問題は何だったのでしょうか・彼らはルカ9章1-2節で、イエス様の權威が与えられて、すべての悪霊を追い出して、病気を直し、神の国を宣べ伝える權威を与えられていました。しかし、その權威を用いなかったという過ちがあります。なぜ用いなかったのか？イエス様は、彼らが単にご自身に対する力を信じていなかったことに憤りを抱いておられるのではないと感じます。むしろ、この子が「ひとり息子」であることに深い同情を寄せられているからではないかと思えます。イエス様ご自身が、神の独り子としてこれから苦しみにも遭います。イエス様はひとり息子だということで、彼に対する憐れみは深かったのではないかと思われれます。

ところが、弟子たちの中で自己中心的な思いが入り込んでいたのではないかと思われれます。このように弱くされている者に対する憐れみが少なくなっていて、自分たちのことばかりを考えるようになっていたのではないかと思えます。それで、この子も悪霊が追い出されるのだという信仰を抱

くの妨げになっていたのではないかと思います。輝かしい栄光だけを追い求め、ご自身を捨てて父なる神に仕えておられるイエス様に、弟子たちが付いていけないという問題があるように思われました。これは私たちに対する警告ですね、憐れみの欠如による、信仰の欠如です。

2B 渡される人の子 43-45

9:43 人々はみな、神のご威光に驚嘆した。イエスのなさったすべてのことに、人々がみな驚いていると、イエスは弟子たちにこう言われた。9:44 「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に渡されます。」9:45 しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。このみことばの意味は、わからないように、彼らから隠されていたのである。また彼らは、このみことばについてイエスに尋ねるのを恐れた。

人々は、神のご威光に驚嘆しています。しかしイエス様は弟子たちのほうを向いて、しっかりと、はっきりとご自身の十字架の道を教えられます。今から、この道に行かれるイエス様についていかなければいけません。自分自身も自分を捨てて、ついていかなければいけません。焦点は、人間的な、力と権威の現われる神の国ではなく、ご自身を捨てるところから生まれる神の国であります。ところが弟子たちは理解ができませんでした。それが隠されていた、とありますが、そうです、私たちの歩みでも、理解できないことが起こります。そして時が来ないと分からないことがあります。弟子たちは、尋ねるのも恐れています。なぜなら、それが意味するところを知れば、自分たちの拠り所が壊れてしまうのではないか、という恐れがあったからだろうと思われれます。

3A 弟子たちへの戒め 46-56

1B 子供を受け入れる者 46-48

9:46 さて、弟子たちの間に、自分たちの中で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。9:47 しかしイエスは、彼らの心の中のを知っておられて、ひとりの子どもの手を取り、自分のそばに立たせ、9:48 彼らに言われた。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる者です。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れる者です。あなたがたすべての中で一番小さい者が一番偉いのです。」

弟子たちの中に、自己中心的な思いが入ってきたのではないかと思った理由が、この出来事です。おそらく、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが山に上って、それで戻ってきたので、彼らの中でねたみが起こったのではないかと思います。そうこうしているうちに、小さき者をないがしろにしていく傾向が彼らの中にできたのではないかと思われれます。イエス様が十字架につけられることについては、言葉では分かっているでもその意味が分からない彼らは、イエス様がエルサレムに行かれてユダヤ人の王となられて、ローマを倒すものだと思っていました。そこで、自分がイエス様の右の座、左の座に着くのだ、という議論をしていたのです。

そこでイエス様は、小さな子をそこに連れてこられたのです。この子を受け入れることこそが、わたしを受け入れる者だと言われています。先ほど、イエス様が弟子たちに激しい言葉をかけられ

たのは、悪霊につかれたひとり息子をご自身の苦しみとしていたからです。彼がないがしろにされたのは、ご自身がないがしろにされたのと同じように感じておられたからです。だから、このような小さい者を受け入れることによって、神の国の拡がりを見ることができます。ですから、小さき事における大きな力であり、そこで自分を捨てなければいけないのです。

2B 反対しない者 49-50

9:49 ヨハネが答えて言った。「先生。私たちは、先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、やめさせました。私たちの仲間ではないので、やめさせたのです。」9:50 しかしイエスは、彼に言われた。「やめさせることはありません。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。」

自分を捨てる道が、ここでも教えられています。イエス様が悪霊を追い出されました。自分たちもイエスさまの御名の権威で、悪霊を追い出しました。ところが自分たちの仲間ではないのに、追い出しています。ヨハネがやめさせています。山にいつしょに上って、主のご威光を見た者です。彼の心の中には、多少なりとも高ぶりがあったことでしょう。

イエス様は、戒められました。「あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。」とあります。分派というものが、教会の中に忍び込みます。自分たちの仲間だけで他者を排除します。他の人たちが入っていくことができないようにします。自分が積極的に心を広げないために、心の中で差別をしているために、自分の意見や考えに合っている人だけを集めます。しかし、イエス様は、「彼らもあなたがたの味方なのです。」と言われました。そして分派に陥っている人々は、本人たちはイエス様に従っていると思っています。確かに、その示された御言葉はその通りなのかもしれませんが。けれども、イエス様はもっと大きな方であることを知るべきです。

3B 拒む者 51-56

9:51 さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、9:52 ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリア人の町にはいり、イエスのために準備した。

さて、ここからルカによる福音書 19 章に至るまで、「ガリラヤからエルサレムに向かう道」に入ります。「天に上げられる日」とは、十字架につけられ、よみがえり、天に上げられることです。他の福音書には、わずかしか書かれていない箇所を、ルカは詳細にそこで主が教えられたことを記します。例えば、良きサマリア人、放蕩息子などの有名な話は、その時に行われました。全ては、イエス様がエルサレムに向かうという緊張の中で、ご自身の最期を全うしようと意識されている中で語られたものです。弟子たちに、十字架への道を教えるために教えられたものです。

サマリアの町に使いをやって、準備をさせました。おそらくその中にヨハネもいたことでしょう。そして、泊まるべき宿を用意したりしたのではないかと思います。

9:53 しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。9:54 弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」9:55 しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。9:56 そして一行は別の村に行った。

サマリヤ人は元々、ユダヤ人に敵対心を抱いていました。ユダヤ人もサマリヤ人が嫌いでしたが、サマリヤ人もユダヤ人が嫌いでした。アッシリヤ捕囚によって、異邦人とイスラエル人との雑婚によって生まれたのがサマリヤ人です。そして宗教も、混合宗教になっていました。けれども、彼ら自身がこれこそが真正な宗教だと思っていました。エルサレムのシオン山ではなく、シエケムにあるゲリジム山が神の選ばれた所だと信じていました。ところが今、イエス様はエルサレムに顔を向けられます。それでサマリヤ人はイエス様を拒んだのです。

けれども私たちは、ヨハネ 4 章で、すべてのサマリヤ人がイエス様を拒んだのではないことを知っています。イエス様は確かに、ユダヤ人は正しい神を信じているが、どこの山ではなく、霊とまことをもって主を礼拝する時が来ていると女に話されました。そしてその女によって、イエス様を信じる人々が現れました。そして使徒の働きには、ピリポの伝道によって多くのサマリヤ人が信じました。ですから、忍耐が必要です。今、サマリヤ人がイエス様を拒んでいるからと言って彼らが裁かれるわけではありません。

ところが、ヨハネがなんと、昔のエリヤと同じようなことを言います。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」ヨハネは、やはり高ぶっていたと思います。高い山において、彼はエリヤを見ました。そして今、イエス様を拒んでいるサマリヤ人がいます。彼らはエリヤがかつて天から火を降らせたように、私たちが降らせましょうか？と言っている訳です。ヨハネはエリヤと同列に自分を置いてしまっています、自分が何者かを忘れてしまっています。

これがいかに、イエス様の心から離れているかは、新改訳の引照の欄で読むと分かります。「そして彼は言われた。『あなたがたは自分たちがどのような霊的状态にあるのかを知らないのです。人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなくそれを救うためです。』」命を救うために来られたという使命から、ヨハネは目を離していました。そしてどのような霊的状态にあるかを知らない、とありますが、ヨハネは単純に義憤に燃えていたわけではありません。ユダヤ人は元々、サマリヤ人が嫌いだったのです。彼は純粹に怒っていると思っていたかもしれませんが、そうした民族的差別が混じっていたであります。

それさえも、私たちは捨てなければいけません。自分と同じ民族でない人、そして、福音に心を閉ざす人々に寛容になれるか？ 忍耐して、愛をもって仕えることができるか？ 私たちの内なる戦いはここにあるでしょう。拒む人々に対して、次第に苦みを抱くようになって、それで怒りと苦みを持ちながら神の働きをしていきます。これはイエス様からのものではないので、いずれ倒れてしまいます。また倒れた方がよいでしょう、主は苦みと怒りを持っている方ではないからです。

4A 用意のない弟子たち 57-62

こうして、十二弟子たちがこれから、まだまだイエス様からの訓練を受けなければいけないことが分かりました。次に、イエス様についていくことのできない三人の人のエピソードが出てきます。十二弟子とは異なる課題がここで提示されています。それは、「神の国とその義を第一とする」心備えができていないという問題です。どんなことがあっても、イエスに従うため自分を捨てる用意ができていない人々であります。

9:57 さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。」9:58 すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所ありません。」

イエス様は人の心をすべて知っておられる方です。この男は、「どこにでもついて行きます。」とっていますが、まさか外泊する時に野宿するかもしれないという用意まではできていませんでした。イエス様はその宣教の働きにおいて、そこに行かれた時、人々が泊めてくれることによって行きました。だから泊まる場所は保障されていませんでした。けれども、「泊まる場所が保障されていなければ、行くことはできません。」という条件を、この男は付けていたのです。

この前、興味深い会話をあるクリスチャンと行いました。ある人から、「クリスチャンがレジャーで楽しんではいけませんか？」という質問を受けたそうです。彼女は返答に困りました。それでこう答えようかな？と思ったそうです。「その楽しみがなくなっても、構わないと思っているかどうか。」そうですね、楽しむことは何ら悪いことではありません。けれども、イエス様が命じられて他のことをしなさいと言われた時に、喜んでそれをやらない、それを捨てる選択を持っているかどうかであります。イエス様に従う時に、条件を付けないということが大切です。

9:59 イエスは別の人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」9:60 すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」

二人目の男は、イエス様のほうから声をかけられました。ところが、彼は断っています。「私の父を葬ることを許してください。」であります。ここの話についてはいろいろな解釈がありますが、今さっき父が亡くなったという状況という解釈。当時は死んだらすぐに葬らなければいけません。もう一つは、当時の埋葬はそのまま遺体を腐乱させるようにして、一年後、その骨を骨壺にいれます。その一年後の骨壺に入れる儀式だということ。そしてもう一つ解釈があって、それは父が死ぬ時まで私は長男だから世話をしなければいけないというもの。私はこの三つ目は違うと思いますが、一つ目か二つ目ではないかと思えます。

ここで、親の葬儀に出るなという命令をイエス様がしているのではない、ということを知る必要があります。聖書には、あなたの父と母を敬いなさいという命令があります。大事なものは、「まず行っ

て」という言葉です。イエス様が、付いて来なさいと命じられているのに、「まず行って」と言って、優先順位を家族のことにしてしまったことです。ここが間違っていました。父と母を敬うというのは、あくまでもイエス様を第一にして、主にして生きていく中で守るべき命令であり、イエス様よりも両親を大事にするということは、弟子としてふさわしくありません。

「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。」というイエス様の言葉が興味深いです。最初の「死人」は、霊的に死んだ人々のことです。不信者の人たちに、不信者の死者を任せなさいということです。私は個人的に、仏式の葬儀と墓についてはこの姿勢ではないかと思います。未信者の家族の人々に、キリスト教式の葬儀や墓を強要することはできません。偶像礼拝を避けることは、あくまでも神の愛に裏打ちされた、キリストを信じる信仰に基づいていて、個人的、自発的なものであります。ですから、仏式の墓について、仏壇については、未信者の家族に任せる、また返還は檀家の寺に任せるなど、未信者の手に渡して構わないと思っています。もちろん、そのまま自分で処理することも可能です。それは、一人一人が決めればよいことでしょう。

大事なものは、イエス様の宣教命令に従うことです。「あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」家の事がらで、思い煩いによって福音宣教の幻を曇らせてはいけません。

9:61 別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」9:62 するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

「暇乞い」つまり、最後の挨拶をさせてください、ということです。これはエリシャが、エリヤに付いていく時に、家族たちに行ったことです。けれどもイエス様は、ご自身に付いていく時はなんともっと厳しい基準を持っておられます。これもまた、暇乞いをすることが問題なのではなく、「ただその前に」という優先順位が問題であります。暇乞いができなくても、それでもイエス様について行きますという覚悟ができていなければ、弟子にふさわしくありません。

イエス様は、私たちにはあまり分からない例を出しておられます。「手を鋤につけてから、うしろを見る」ことをやってしまうと、畑の溝が直線にならずにずれていきます。だから、一度、鋤を付けたらそのまま前を見なければいけません。ノアというゴスペル・グループの人たちは、「もうふりむかない、もうふりむけない、もうつぶやかない、もうつぶやけない、イエス様と共に歩む。日々はもう輝いている。」という歌をうたいましたが、まさにその通りです。イエス様と共に歩む日々を始めたら、もう振り向けないのです。

以上ですが、イエス様についていくということは、自分を捨てて日々、自分の十字架を負うということは、このようなことであることを知ることができたかと思います。小さき者たちを受け入れていく生活、他の人々を受け入れていく寛容さ、怒り、裁きをくだすことから、愛をもって仕えることに集中すること、そして何よりもイエス様に従うことを優先させること、です。